

は こ だ て 紀 行

函館空港事務所

函館空港は、函館市内から東に10km津軽海峡の海岸沿いの丘陵台地にある。場周道路沿いの少し高台になっている場所に立つと、北に横津岳、南に津軽海峡を隔てて青森県の下北半島、西には海に向かい



【五稜郭】

鯨の頭のように突き出ている函館山、東に活火山の恵山（えさん）と風光明媚な眺望を有しているのが確認できる。

函館は、観光の町である。空港の利用客に占める観光客の割合も多いと考えられるところであるが、函館空港の旅客数の推移を見ると、平成14年までは年間250万人の利用があったが、このところ年々利用客が減少し平成17年には210万人と落ち込んでいる。函館空港事務所としても「函館空港利用促進協議会」等の活動に積極的に取り組んでいるところであり、空港を核とした観光客の掘り起こしが、函館の観光促進の一助になればと考えている。

函館は、神戸や長崎と同様の港町であるが、観光スポットがコンパクトにまとまっており、近代的な建物が少なく自然と調和していることで、素朴な味わ



【金森倉庫群】

いを醸し出している町である。

函館空港事務所は、空港長以下総勢80名、管理職を含む年寄り（年配者）は、ほぼ全員単身赴任者である。転勤族の少ない楽しみの一つは、その土地をじっくりと知ることが出来ること。



そこで、晴れた日の休日、「函館」を再認識しようと路面電車に乗り込む。沿線上に市内の観光スポットが多数有る路面電車が函館観光には最適。車内は、観光パンフレットを手にしたカップルや女性のグループ、あとは地元のお年寄り

が目立つ。団体客はバス観光、地元の若者はマイカー利用なのか、路面電車は、のんびりとした空気を運んでいく。

昔ながらの修学旅行の香りが残る湯ノ川温泉から函館ドック行きである。

五稜郭の駐車場で降りてみる、今は、新設された「五稜郭タワー」から緑の「五稜郭公園」の鮮やかな星形を望むのみであるが、幕末の「箱館戦争」に思いを馳せると、函館が歴史の町でもあることを感じさせる。再び路面電車に乗り込む、5分間隔で電車が来るので待たずに済むのもうれしい。函館駅前には乗り越し、十字街で降りる。観光メインスポットである函館山山麓一帯に広がる「元町」と赤レンガ倉庫群に近い駐車場である。

函館元町界隈は、坂の町でもある。函館山の麓からのびる19本の坂それぞれに坂の名前とその由来が書かれた標識が立っている。二十間坂を登る。

幅が20間（約36m）の広い坂道だ、かなりの勾配である、登り切ったあたりには、「ハリストス正教会」や「カトリック元町教会」などの様々な様式の教会が建ち並んでいる。元町のように各国、各宗派の教会が隣接しているのは世界的にも珍しいと聞かされたが、その空間に違和感が無いのが不思議なほどだ。



教会群から少し歩くと、元町公園に至る。明治から昭和にかけて道南の行政の中心を担った場所である。「函館市旧イギリス領事館」「旧北海道庁函館支庁庁舎」「旧函館区公会堂」など歴史や文化を学ぶには事欠かない洋館が建ち並んでいる。

レンガ造りの「旧ロシア領事館」を過ぎたあたりから浄土院の寺院である「称名寺」曹洞宗の寺院である「高龍寺」など訪問者が絶えない寺院が点在している。「箱館戦争」で亡くなった旧幕府軍会津藩士も眠るという「高龍寺」の見事な龍の彫刻が施されている総ケヤキ造りの山門を横に見ながら数分歩くと、青い海を見下ろす小高い丘の中腹にひっそりと「外国人墓地」がある。

1854年、ペリーの来航時、亡くなった2人の水兵の墓を作ったのが始まりといわれるが、手入れの行き届いた墓所は「150年の時」を感じさせない可憐なたたずまいだ。

路面電車通りに戻るため、船見坂を下るが、歩き疲れての下り坂は足にこたえる。函館ドック前の駐車場で電車に乗り込み湯ノ川方面へ戻ることにする。函館山にも登りたいし、赤レンガ倉庫群のライトアップも見たいが、来週にでもしよう、そこがこの地に暮らしていることの利点である。

【函館市旧イギリス領事館】



【旧函館区公会堂】



【カトリック元町教会】

